

2021年11月19(金)～20日(土)

## 旧東海道ブラ歩き(11) 三島—新蒲原

前回は11月6日に這々の体で芦ノ湖から三島まで辿り着いたが、今回はその経験に懲りてリュックの紐の長さを調整し、更に歩行用の靴を新調して三島から先に挑戦した。初日は早朝の新幹線で三島まで行き、そこから東田子の浦まで歩き、一旦東海道本線で沼津に戻って宿泊、2日目は朝沼津から電車で東田子の浦まで行きそこから新蒲原まで歩き、東海道本線に30分ほど乗って三島に戻りそこから新幹線で帰京した。歩数は初日が42375歩、2日目が41197歩、実はこれまでは2日間連続して歩いたことがなかったので一寸心配だったが何とか無事に歩き通すことが出来た。先人の旧東海道歩きの記録を見ると東京から日帰りで行かなくなる辺りは基本的に新幹線の停車する駅の間を例えば2泊3日で歩き、目的地到達後新幹線で帰京するとのパターンを繰り返しているようである。この例に倣うならば我々も三島から途中2泊しながら静岡を目指すべきであるが、何分にも高齢で、且つ夫婦での旅と言うこともあってこのペースにはついて行けない。従って健脚の人が3日で歩くところを4日で歩くことを目標にし、今回はそのうちの2日分を歩いたというわけである。本当なら蒲原までいくつもりだったが新蒲原で16時となり、日没までに蒲原に着きそうにないことから新蒲原で打ち切って帰京したものである。次回はここから始めて何とか2日間で興津を経て静岡(府中宿)まで到着したいと思っている。

今回の旧東海道ブラ歩きはなんと言っても富士山と駿河湾の美しい景色に尽きる。既に旧東海道を走破した吉田さんの記録を参考に、沼津から田子の浦までは海岸の堤防の上を歩いた。2日間共に天気恵まれこの区間の歩行中は左に駿河湾の壮大な眺め、右に冠雪の富士山、しかも堤防の上の道が整備され、車も来ないので初日は4時間、2日目が1時間の合計5時間この景色を見ながら歩いた。この区間は堤防の外側は松林が続いているのでこの上に聳え立つ霊峰富士を前方右から真横、それに右後ろに見るまでずーっと眺めたことは勿論これまで無かったが、これだけで今回の旅は十分価値がある、そして思い出に残る旅であった。実はここを歩くのは旧東海道からは外れるのだが、それにより旧東海道の各種記念碑を見損なうマイナスを十分に上回るプラスがあった。

### Day 1 11月19日(金) 三島—東田子の浦 快晴

朝7時4分品川発新幹線で8時少し前に三島に到着、一休みして沼津に向けて歩行を開始した。8時半頃連馨寺で芭蕉老翁墓をみる。その側面に「いざともに穂麦くらわん草枕」と言う句が刻まれていると案内書には出ているが、旧くて文字が崩れていて読めない。しかしこんなところに芭蕉の墓があるはずがないと思って調べると芭蕉の遺骸は近江の木曾義仲の墓の隣に葬られたとあり(この点は第19回のブラ歩きの際義仲寺で確認した)、最後の

句は有名な「旅に病んで夢は枯れ野をかけめぐる」で、ここに刻まれている句とも異なり些かあやしい。9時20分頃源頼朝と義経がお互いが石に座って対面した八幡神社境内の対面石を見る。9時半には黄瀬川を渡るが、ここで富士が見えたので写真を撮る。その後暫く旧道を離れて黄瀬川が合流した狩野川に沿って歩く。旧道に戻り沼津の町中で「旧東海道川廓通り」との表示があるところを歩いていたら偶々この日の宿の「リバーサイドホテル」の前を通る。10時50分に「沼津宿」との石の案内標識を過ぎ10分ほどで乗運寺境内の若山牧水の墓を見る。

11時15分に旧道から離れて千本浜公園を経て11時半遂に堤防の上に到着、目前に駿河湾が広がり幼稚園児が海辺で遊んでいる（写真1）。海辺にはポツポツと釣りを楽しんでいる人がいる。折角なので砂浜に降りて駿河湾の水に手を触れようと思ったが、昔はいざ知らず、今はできるだけ体力の消耗を減らすべく諦める。堤防では時々散歩中の人に行き交う。その人達との会話でこちらが京都を目指して歩いているというと同様に驚きの表情を浮かべ、次にお気をつけてと言われる。そうこうするうちにスケートボードの二人組に行き会った。一人が堤防の陸側の急斜面をスピードで駆け上がったたり降りたりし、もう一人が同じくスケートボードをはいて堤防の上を同じスピードでスマホを長い棒の先につけてその様子を撮影している。何度も顔を合わせ彼らの方からこんにちとはと挨拶してきたので色々話をし、今日は吉原辺りまで歩くと言ったら大変驚き、別れ際に家内が我々二人の平均年齢が80才だと言ったら我々に合掌して見送ってくれる。なんともむずがゆい次第であった。当たり前だがかなり年寄りに見えるらしい（実際そうだが）。旧東海道を歩く人はここを歩かないのでこの堤防にはそんなに遠くまで歩く人はいないのであろう。富士があまりにもきれいなので通りかかっている人に頂上が冠雪した富士をバックに写真撮影を依頼（写真2）。遠くに一本松が見える。駿河湾は左に大きく弧を描いているがそちらの方面（写真には写っていないが向かって左側）には白煙を吐く煙突が何本も見える。おそらく製紙業が集中する吉原辺りだと見当をつけたが、翌日そこまで歩いてこの観察が裏付けられた。

13時頃堤防の脇に腰掛けて自宅から持参のおにぎりで昼食。再度松林越しの富士を撮影する（写真3）。後ろを振り返ると沼津方面から伊豆半島がきれいに見える。まるで絵のようだ。はじめは随分遠くに見えた一本松を過ぎ、吉原の煙突群が近づいてきたが、だんだん日が落ちて心細くなったので目標の吉原は諦め、堤防を降りてすぐの東田子の浦駅発16時前の東海道線で沼津に戻ってリバーサイドホテルに投宿。以前の東急ホテルで、吉田・西村の両氏も泊まったところだ。我々も沼津から吉原の間でホテルや旅館を調べたがここが一番良さそうなのでここにしたが結果は大正解。1泊朝食付きで14000円弱と手頃な値段で、大変感じの良いホテル。家内は部屋の窓から見える沼津港と富士を写真に収め、日が暮れるとホテルの裏に流れる狩野川から皆既月食の写真を撮る（写真4）。

夕食は折角なのでおいしいものを食べようというのでホテルでタクシーを頼んで沼津港の飲食街に行く。偶々飛び込んだ双葉寿司は握りの職人が 4 人いてカウンターは常連で賑わう。ここに割り込んで地魚を中心に握って貰う。鱈、鰹、蛸、烏賊、ヒラメ、クエなど実によくうまい。1 巻ずつ出てくる。途中で地場ではないが大間のマグロもあると聞いて一寸びびったがエイヤッと注文。これが絶品。地酒を飲んで食事を堪能し、代金は二人で 1 万円強。家内共々大満足だった。これだけでも沼津に泊まった甲斐があった。また行きたい場所だ。

## Day2 11 月 20 日 (土) 東田子の浦—新蒲原 快晴

朝食をたっぷり食べ、ひげ剃りや下着類などを段ボールで東京に送って身軽にして 8 時 15 分頃ホテルを出発。沼津から東海道線で東田子の浦へ向かう。今日も引き続き堤防を歩く。天候は昨日以上で空に雲一つ無い。途中何人かからどこまで行くのかと聞かれ、そのうちの一人はお婆さんで毎日海岸のゴミを拾っているという。年を聞いたら同い年だった。その人に吉原に行く道を聞き、田子の浦漁港の手前で旧東海道に戻る。その前に港の写真を撮る (写真 5)。ここは先刻ご承知の山部赤人の「田子の浦うち出でてみれば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける」で有名で、我々も一首試みるが才能の無い悲しさ、何も出てこないのは甚だ残念至極だった。

ここまでは東海道線に沿っているが、吉原駅の手前から線路を越えて北側にそれる。この辺りはどこを歩いても製紙工場だらけで、しかも未だに煙突からは白い煙がもくもくと出ている。一時の公害騒ぎはなくなったが、それとともに街も寂れてきている。高校の友人はこの割烹旅館の息子で野村證券を退職後地元でこれを継いでいたがその後店をたたんで現在は行方不明だ。東海道線を超えるあたりから道が分かりにくくなり、度々近所の人に聞く。それでも何とか国道 1 号の下をくぐって富士を左に見る左富士神社にたどり着いた。

この辺りで旧東海道を歩いているとみられる若者に抜かれる。1180 年源平富士川の合戦で平家が陣取った平家越碑を過ぎ吉原本町の商店街に入る。随分立派な商店街だがシャッターを下ろしたままの店が何軒もあり活気は全く無い。ここで 11 時 40 分くらいになりこのままでは他にろくな食堂がなさそうなので偶々通りかかった蕎麦屋に入ると、その隣が偶然 (宿泊を検討した) 鯛屋旅館でこの宿経営の蕎麦屋だった。蕎麦を食べて 12 時半頃出発、地図を頼りに南下。

この辺りの道路は全く車優先で歩行者にとっては歩道とは申し訳程度で大変危険だ。また、そもそも歩行者は少ないので信号がない。車の行き交う間を駆け足で反対側まで行くという経験を何度もした。大きな交差点には横断歩道がなく、道路にかかる歩道橋を渡らねばならないが、この為の階段の上がり下りは年寄りにとっては大変きつい。東京が如何に歩行者

に親切かはよく分かる。地図を見て道を決めるのは専ら家内の役割。小生は自慢じゃないがこれは不得手だ。

14時17分富士川の長い橋を渡る。歩道は狭く自転車が来ると横に除けてやり過ごす。しかし景色は良く、午後になって出てきた雲の上に富士が山頂だけを見せている（写真6）。道中数組だが我々と逆方向に歩いている人とすれ違う。そのうちの一组は我々よりは若いのが矢張り夫婦で歩いていて一寸挨拶を交わす。

富士川を超えると直進の道がなくなり、右方向に向かい、左折して急坂にさしかかる。標識はあるのでこれで間違いは無いが道幅が狭く住宅地なのに人も余りおらず、所々昔の常夜灯がある。地図では東名の下をくぐることになっているがなかなかそこに到達せず、道案内役の家内も若干焦り気味となる。人に尋ね、また道ばたに止まっていた自家用車の女性ドライバーに聞いても分からないという。偶々そこを通りかかった犬を連れた女性が我々をトンネルまで案内してくれてやっと窮地を脱する。その後しばらくは寂しい舗装道路が続くが今度は東名をまたいでその南側に出る道が分からなくなる。だんだん日が傾いてきて心配だ。偶々3才の男の子を連れた母親に会ったので道を尋ねたところ、子供が車が好きで今東名に架かる橋の上で自動車を見せていたとのことで、ここで再度元気が出る。程なくこの橋を渡り急坂を海の方に下りるがその前あたりからそれまで道にあった「旧東海道」の標識がなくなり再び不安になる。このあたりで蒲原行きは諦めその一駅手前の新蒲原を新目的地に修正した。坂の途中で再び人に会って新蒲原駅を訪ねたところあと20分も歩けば到着とのことで安堵して歩き続ける。坂を下りきったところに小公園があったのでここで木の根っこの形をした椅子に腰掛けて水分を補給。暫く行くと16時に「蒲原宿東木戸」の標識に行き着く。それから5分ばかり歩き続けて左折したところ、新蒲原駅前に出たので16時24分発三島行きに乗り、そこから新幹線に乗り換えて18時半頃帰宅した。この二日間で東海道線だと8つの駅、汽車で走ると32kmの距離を歩いたことになる。

最後に是非付記したいのはリュックの紐の長さとの疲れの関係である。前回箱根の下りでへばったがこの写真を友人達に送ったところ、この道の先達であり高校時代からの友人でもある山下茂幸さんからリュックの背負い方と紐の長さの関係について懇切丁寧な指摘がありそのアドバイスに従ったところ、体が後ろに反り返らず、疲れもあまり感じなかった。この点山下さんに大いに感謝する次第である。（写真次頁）



写真1 駿河湾で遊ぶ幼稚園児達



写真2 右前方には富士山がくっきり

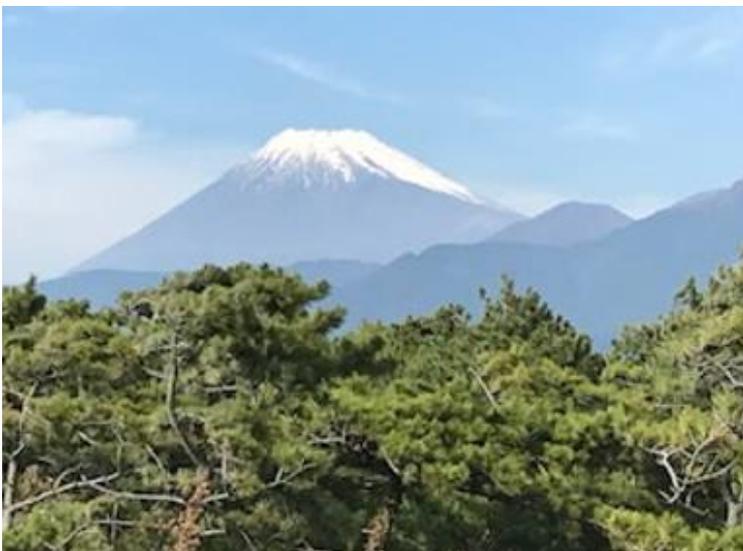


写真3 松林越しの富士の全貌

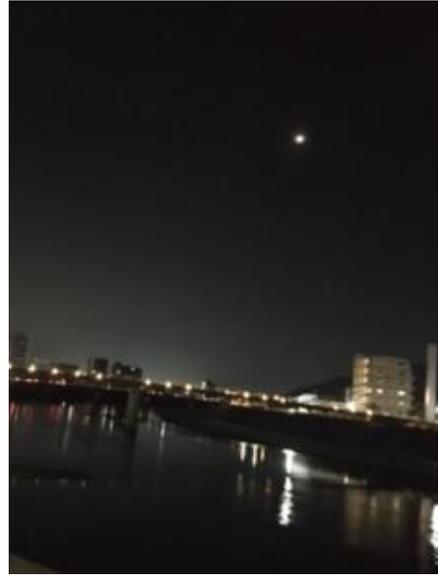


写真4 狩野川から見た皆既月食



写真5 田子の浦港



写真6 富士川からの富士の眺め